

事業計画書

<p>現在の地域課題 に対する本事業 での実施内容</p>	<p>事業背景 台風19号の被害は佐久地域全域に甚大な被害を受けました。現時点において復旧復興が進んではいますが、まだ田畑の小さな被害を受けた所までは手が回っていないのが現状であります。また、昨年引き続きコロナウイルスの影響により地域参加者への募集にも大きく影響があるものであると考えます。 だからこそ、ここで自粛ではなく感染症対策を講じ一歩でも前へ進んで行きたいと考えました。 年々休耕中の田畑は多く、佐久地域の資源を持続し次世代に伝える必要があり、佐久地域では古くから水田を利用し小鮒の養殖を行っており、最盛期は、農薬米の販売、そしてフナ生産と一石三鳥の利点から急速に普及し、多い時には60t、約1億円の産業にまで発展しました。 年々生産者は高齢化、後継者不足生産者減少も進み、佐久地域では2006年度には147人2020年には、1/3の47人へと減少、1996年の25.7tをから2020年に1/6の4.3tへと生産量に激減今後も生産者は減少すると考えられる。（別紙2021年6月6日信濃毎日新聞掲載参照） 昨年に引き続き、現時点では、身近に迫るコロナウイルスにより学校生活は過去に経験したことのない時間を過ごしています。この局面に子供たちはどう過ごすのでしょうか。 ※本年は、昨年に引き続き岩村田小学校22クラス、小雀保育園3クラスには観賞用の水槽を貸し出し小鮒のふ化から、成長を見守ると共に観察を計画しております。岩村田小学校は来年度創立150周年を迎える事から一年を通し【生き物から学ぶ事業】とし取組む計画を予定しております。また、小雀保育園では年間を通じ水田での体験を行って頂きます。 幼少の頃から自然体験、【生き物唐から学ぶ命の大切さ】、地域活動、家族行事に参加し、多感な青少年期に多くの体験をした子供は、規範意識、人間関係能力、文化的作法、教養等の人間としての生きる力を多く兼ね揃えた人材へと成長する可能性が広がることでしょう。子供は一人で成長するわけではなく、家庭や地域、学校などの生活の場で様々なことを経験しながら成長していくものです。子どもたちが変化しやすい厳しい時代を生きていくためには様々な経験し自ら考え行動していける人へと大きく成長を期待します。</p>
<p>対象となる人・ 範囲</p>	<p>近隣の小学生・保育園園児・参加者には、休耕水田を再生するところから、関わり水田の仕組み、小鮒を産卵⇒ふ化⇒幼魚⇒成魚までの過程を実際五感で感じ、今学校等で学べない唯一無二の体験を行う。地元の友達とは違う仲間を作る事で、違った価値観や経験を学び、参加児童の視野を広げて参ります。 募集については、市民新聞等で周知するほか、趣旨、目的共に賛同いただける方に構成メンバーSNS等活用し佐久平・岩村田地域を中心に募集します。</p>

<p>事業の効果、達成目標 (達成目標はできる限り数値で示すこと)</p> <p>記載ポイント</p> <p>事業の ・公益性</p>	<p>「公益性」の視点 昨年は地域参加者募集時には既にコロナウイルスの感染が影響あり、地域参加者募集時の状況が環境に合わず参加頂く事が出来ませんでした。本年は少しでも多くの方へ告知して参りたいと考えております。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域学校との連携により、コミュニティースクールの一助とし、経験豊富な水産試験場・生産者の皆様が今の世代へ伝える機会を創る。 ・近年田畑に大人、子供たちは関わる時間や機会も減ってきている中、水田に目を向け伝統である佐久特産の「小鮎」を地域住民に知って頂き、一年間自然体験、田畑作業、調理（加工）を通して共に食の提供を佐久っ子に地域魅力を伝える事ができる。 <p>「発想の豊かさ」や「創意工夫」の視点 屋外の作業の為 しっかり感染症対策を行うことが出来ると考えます。地域高校生・小学生に休耕水田を再生する過程から携わることにより他では出来ない体験をして頂けるよう4月以降お声がけを致します。生育の状況を観察、飼育出荷することで命の大切さを感じ取ることができる。</p> <p>販売に携わることで、お金の大切さ、苦手なコミュニケーションにも積極的に取り組める。（どろんこリクリエーション等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校給食等の食品ロスの観点より、残飯（パン類）にご協力いただきエサ代の削減や事情への関心を高める。 <p>「波及効果」や「発展性」の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐久特産の小鮎の生産者が減少、害鳥類による出荷量の減少を地域住民の皆様を知って頂くと共に食文化を今の世代に知って頂く事ができる。 ・佐久市伝統の小鮎を育てていくうえで土づくり、産卵、孵化、飼育、出荷、加工の一連の流れを体験し命の大切さを始め五感で食文化を自ら学べる。 ・若者が事業に取り組むことで、休耕農地の再利用の普及 ・需要家へのニーズ対応が可能である。 ・地域企業が活動を利用し、事業のみならず幅広い分野で付加価値を生み出せる。
<p>詳細 (活動内容・方法・スケジュール等をできるだけ詳しく、別添資料のある場合はその旨を記載する)</p> <p>記載ポイント</p> <p>事業の ・独自性 ・発展性 ・実現可能性 ・団体の自立促進</p>	<p>別紙参照</p>
<p>重点テーマに該当する理由</p>	<p>※該当する場合のみ記入</p>
<p>翌年度以降の取組</p>	<p>翌年度以降の活動 年間を通し、休耕水田を利用し子供たちが自由に遊べる居場所づくり、お米作り体験、小鮎の養殖</p> <ul style="list-style-type: none"> ・居場所づくりには地域のつながりや人間関係が希薄化しているといわれる自然の真ん中で、水田の作業を通じ、人がつながる空間を作ろうと考えます。 <p>誰もがふらりと立ち寄れるような自由な場も。運営する人々からは「地域のためであると同時に私の居場所にもなる」という声も聞こえてきます。</p>

事業スケジュール別紙

実施箇所	佐久市岩村田2542-1 休耕水田 300坪		
実施期間	事業開始予定年月日	令和4年	4月 1日
	事業終了予定年月日	令和5年	3月 28日
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・養殖に必要な環境づくり (除草作業・土づくり) ・トラクター田起こし 2回 ・ショベルカー水田整備 1回 ・参加者募集の計画実施 ・休耕田畑の再生 (除草作業・土づくり・畔シート) ・周辺水路清掃 ・養殖に必要な環境づくり ・地域支援者、保育園・幼稚園・地域小学校児童共に作業実施 		
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・土づくり、畔整備、産卵場所、防護ネット準備 ・親ブナの産卵準備 		
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・水質・温度・生育管理・餌やり・専門家指導 (水産試験場) ・生産者指導・除草作業・防護ネット準備・支援者、小学生児童共に作業実施 		
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・水質・温度・生育管理・餌やり ・トラクター田起こし 1回 ・除草作業・防護ネット準備 		
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・水質・温度・生育管理・餌やり ・除草作業・防護ネット作業 ・出荷に向けた研修準備 		
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・水質・温度・生育管理・餌やり ・除草作業 ・出荷作業 ・学校他 調理実習 (ご協力頂いた地域の皆様) ・商店街にて販売体験 ・事業検証・報告書作成 		
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度へ向けた水田整備・事業実施検証 ・トラクター田起こし 1回 ・ショベルカー水田整備 1回 ・事業検証・報告書作成 		
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業実施検証 ・報告書作成 ・トラクター田起こし 1回 ・ショベルカー水田整備 1回 		
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業検証 ・次年度事業実施計画 		
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業検証 ・次年度事業実施計画 		
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業検証 ・次年度事業実施計画 		
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業検証 ・次年度事業実施計画 		

佐久小ブナ出荷激減 20年は4.3トピック時の6分の1

佐久地域の伝統食「フナの甘露煮」の素材となる水田養殖の小ブナの市場出荷量が減少の一途をたどり、2020年は4.3トピック時の6分の1に落ち込んだことが5日、佐久浅間農協(本所・佐久市)のまとめで分かった。県水産試験場佐久支場(佐久市)によると、食生活の変化を背景に、生産者の高齢化や後継者不足が影響している。

フナの養殖は、例年5〜6月で養殖する生産者に提供し月に親ブナを水田に放して、秋になると、養殖し産卵させ、育った小ブナを秋に生産者が市場向けに4〜7月に水揚げするという流れ。親ブナは佐久支場が育て、有料で市内のスーパなどが取り扱



県水産試験場佐久支場で飼育された親ブナ(5月20日)

食生活変化、養殖に手間… 後継者不足で生産者減少



佐久浅間農協の出荷量は統計が残る1989年以降、96年の25.7トをピークに2014年に初めて10トを下回り、その後も減少が続いている。生産者数も、記録が残る06年の147人から、20年には約3分の1の47人になった。小ブナなどの川魚加工販売の「魚甲」(佐久市)の市川章人社長(71)によると、30年ほど前は年間約5トを扱っていたが、現在は1トほどになった。小ブナを仕入れる生産者数は現在十数戸で最盛期の4分の1程度。ここ4、5年は生産者の高齢化などが理由で一気に減ったという。生産者が減っている要因として、養殖の負担が大きいため、水深を深く取るた

佐久地域のフナの養殖 県水産試験場佐久支場による。佐久地域のフナは佐久地域で古くから食べられてきたが、本格的な養殖が始まったのは1970年代。支場の前の県水産試験場佐久支所が飼育していた觀賞用フナの中に、体色が黒い腹の膨らみ大きいフナが出現。味や食感が優れており、このフナから水田養殖のための新たな品種「改良フナ」が誕生。減反政策の転用作物として認められたこともあり、水田でのフナ養殖が佐久地域で定着した。

佐久地域のフナは佐久地域で古くから食べられてきたが、本格的な養殖が始まったのは1970年代。支場の前の県水産試験場佐久支所が飼育していた觀賞用フナの中に、体色が黒い腹の膨らみ大きいフナが出現。味や食感が優れており、このフナから水田養殖のための新たな品種「改良フナ」が誕生。減反政策の転用作物として認められたこともあり、水田でのフナ養殖が佐久地域で定着した。

甘露煮など「ふるさとの味」思い入れ

日本では川魚を食べる機会が減り、内陸部の信州でも海魚の消費量が多い。それでも佐久地域では、小ブナの甘露煮など「ふるさとの味」への思い入れは強く、取り組みが続く。佐久養殖漁協代表理事の飯田好輝さんは「佐久地域の伝統食、食文化として残したい」と話している。

佐久平総合技術高校(佐久市)では、生徒向けの実習として近くの水田でフナの養殖に取り組んでいる。農業科の教員は5月24日、実習に備えて親ブナ



水田の一角を網で囲って設けた親ブナの産卵場所。卵が付いた水草を水田に移して小ブナを育てる(5月24日、佐久市の佐久平総合技術高校)

地元 食文化継承へ意欲

「魚甲」の市川章人社長は「今後、生産量が増えることはないかもしれない。それでも佐久の小ブナのおいしさを伝えるため、これからも甘露煮を作り続けたい」と力を込める。生産者が減る中、佐久市は2017年度以降、希望者を対象に養殖技術研修を実施。水田への放流から水揚げまで県水産試験場佐久支場の職員らが講師を務める。熊川真一支場長は「良質な親ブナを提供するとともに、フナの養殖の技術を指導していきたい」と記す。

県水産試験場佐久支場は5月20日、親ブナの有料配布を行い、約80戸の農家が訪れた。初めて養殖に挑むという佐久市の会社員、谷津英一さん(51)は「一分からないことが多いが、養殖の文化を残すために頑張りたい」と意欲を見せた。(倉原 彩花)

(倉原 彩花)